平成 30 年（2018 年）10 月発行
地域医療ネットワークの会
聖マリアンナ医科大学病院
メディカルサポートセンター　事務局

地域医療ネットワークの会　会報

ち★ネット！

「顔の見える地域連携」を目指した多職種での情報交換と学びの会

それが、地域医療ネットワークの会です！

平成 30 年9月 22 日　第 34 回　地域医療ネットワークの会

テーマ　災害時の対応について話し合おう～もしここが被災地になったら・・・～

東日本大震災から７年半経ちました。また、最近では９月に発生した北海道胆振東部地震や平成 30 年７月豪雨など、この地域でもいつ甚大な災害が起きてもおかしくない状況と言われています。地域に住む人、働く人、全員が災害を想定して心の備えをしておくことが望まれます。今回は、これまで派遣された被災地の状況や川崎市の災害時の対応、災害拠点病院や各医療機関の役割についての講演を元に、災害発生時に私たちが何をするのか話し合いました。　参加：32 施設 77 名

	開会あいさつ　オリエンテーション	地域医療ネットワークの会世話人（聖マリアンナ医科大学病院）永田　ノリ子
	連絡事項	地域医療ネットワークの会世話人（聖マリアンナ医科大学病院）齋　藤　祐　子
第１部		
	「ここが被災地になったら、を想像してみよう！」	
		聖マリアンナ医科大学病院救命救急センター主任医長　下　澤　信　彦
		川崎市災害医療コーディネーター神奈川県統括 DMAT、川崎 DMAT
	「川崎市の災害時医療体制について」	川崎市災害医療コーディネーター　大　城　健　一
	「どこから始める災害対策」	聖マリアンナ医科大学病院事務部管理課、川崎 DMAT　石　上　智　嗣
第２部	グループディスカッション・全体討議	
懇親会	閉会あいさつ	地域医療ネットワークの会世話人（聖マリアンナ医科大学病院）井　上　健　男

第１部の講演では、首都直下型地震など甚大な災害が起きるとどうなるのかを想定して備える必要性、避難所や施設は医療者による訪問があるものの在宅は災害対策がまだされていない現状であること、また医療者、患者家族共に自助、共助を意識し、公助の活用をすることが必要であるという話がありました。病院の災害時機能分化、ケアプランに基づく災害時医療行動、自助互助共助による災害時要援護者対策が基本であり、「災害時」という言葉を消すと普段の地域医療構想、地域ケアそのものであり、災害医療は基本的に普段行っている地域医療の延長上にあるという言葉が心にのこりました。

第２部は８つのグループにわかれて、「支援チームが来たが、何をしてもらえればいい？」「呼吸器が停電で止まってしまった。どうしたらよい？」など災害発生を想定した課題について話し合いました。全体討議の中では公助としての区の対応も知ることができました。明日から災害発生を想定して何をするのか考えるきっかけとなりました。

アンケート結果より　＊参加された方は当日お知らせした QR コートから内容を確認いただけます。

テーマは今後の活動に活かせそうですか？の質問には回答者全員が「はい」と選択していました。フリーコメントには、「まず、自助とゆうところで、患者様とそのご家族が生き残れるように地域と連携して考えていかなくてはと気づかされました。それに加えてまず自分自身の準備をしなければ！という身につまされた思いでした。」など多数のご意見を頂きました。ご協力ありがとうございました。